第23回大学教育研究フォーラム

「学生の成長を可視化し、教育の質保証につなげるために必要なこと」

指定討論資料

入学者選抜方法の違いによる大学生の意識・行動の差に関して

―大学生基礎力レポートのデータを手がかりにして―

2017年3月20日（月）

ベネッセ教育総合研究所

木村　治生

指定討論の視点

大学入試選抜の変化

推薦・ＡＯ入試の増加

今回は
入試区分に
注目

ある特徴を持った学生の増加

学習意欲はあるが、学習スキルが身についていない

多くの大学に
共通の課題

必要となる支援や指導

能力目標を定め、「成長」を可視化する必要

２大学との共同研究の事例から、
学びと成長を可視化する意義と課題を改めて考える

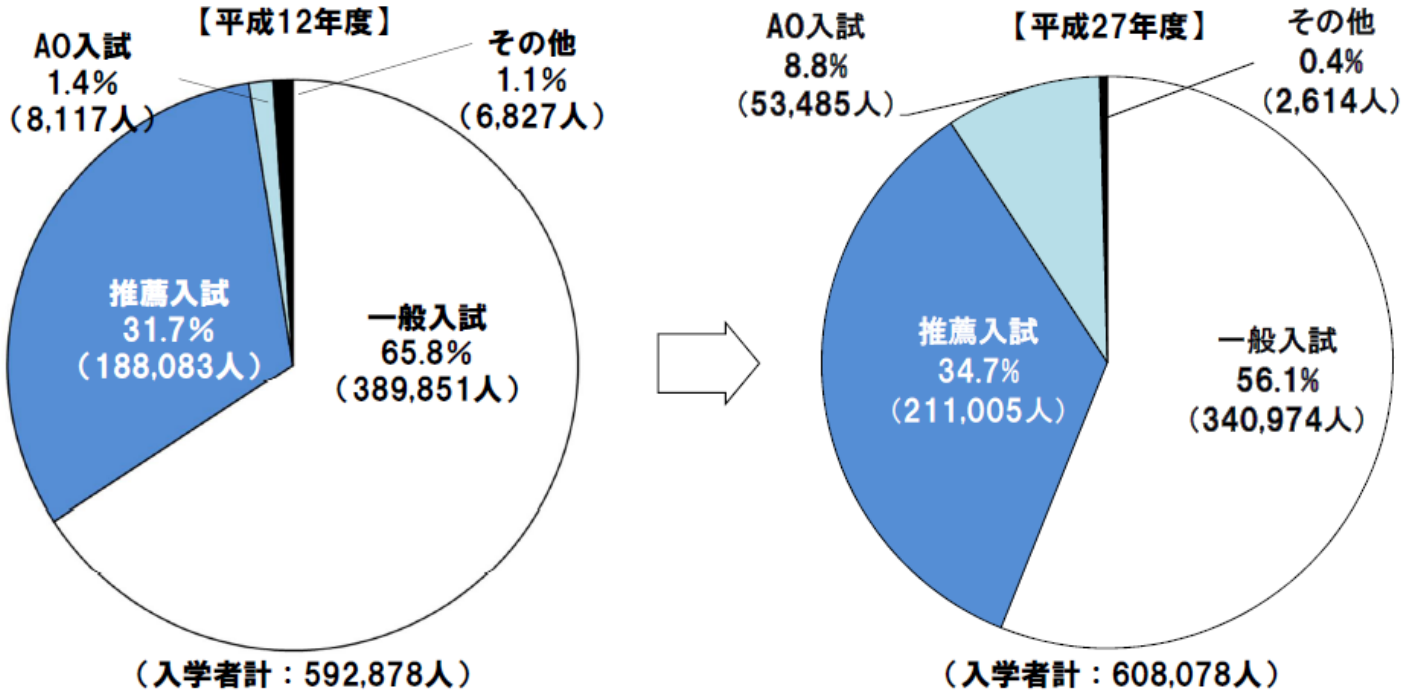
大学入学者選抜の状況

●大学入学者選抜の多様化

推薦入試、AO入試で入学する学生の割合が増加。私立大学に限ると、40.1%が推薦入試で、10.5%がAO入試で入学している（2015年度）。

平成27年度入学者選抜実施状況の概要（平成12年との比較）

平成12年度(AO入試調査開始年度)に比べて、AO入試、推薦入試を経由した入学者が大きく増加しており、入試方法の多様化が進んでいる。



□一般入試　■推薦入試　□アドミッション・オフィス入試　■その他

（注）「その他」：専門高校・総合学科卒業生入試、社会人入試、帰国子女・中国引揚者等子女入試など

選抜多様化の帰結は？

大学入学者選抜の多様化は、
入学者と大学にどんな影響を与えているのか

- **多面的・総合的な評価を重視する政策の流れ**
  1980年代以降、新しい時代にふさわしい高大接続のあり方が検討され、大学入学者選抜の多様化、評価の多元化が推進されてきた。

- **私立大学を中心とした入試戦略**
  多様な能力を持つ学生の確保という文脈に加えて、私立大学を中心に入学定員を確保する必要から推薦入試やAO入試を導入する動きが拡大。

改革がもたらした帰結を検証し、
今後に生かす必要がある

先行研究の知見

●大学入学者選抜と「学力」の関連

推薦入試・AO入試による入学者の学力が、一般入試の入学者の学力に「劣る」という研究がある一方で、「大きくは変わらない」という研究も。

- **推薦入試・AO入試　＜　一般入試**

  甲斐（2007）→東京工芸大学工学部（5教科学力）、柴ほか（2015）→高知大学教育学部（センター入試得点、ただし推薦入学者のほうが教員正規採用率が高い）

- **推薦入試・AO入試　≒　一般入試**

  横山（2016）→千葉科学大学（英語）、池田（2009）→北海道大学（GPA)、赤木ほか（2011）→名古屋学院大学健康学部（GPA、指定校推薦の成績が良い）

●大学入学者選抜と「諸能力・意欲」の関連

推薦入試・AO入試による入学者の諸能力･意欲が、一般入試の入学者より「高い」という研究がある一方で、「大きくは変わらない」という研究も。

- **推薦入試・AO入試　＞　一般入試**

  宮下（2003）→立命館大学（主体性、進路意識）、中室ほか（2014）→慶應義塾大学SFC（リーダーシップ、課題意識、目標）

- **推薦入試・AO入試　≒　一般入試**

  西丸（2014)→X大学Y学部（能力向上感）

先行研究の知見は、各大学の個別性が強い。
複数の大学・学部を含むデータを用いて検証する必要がある

取り扱うデータ

株式会社ベネッセｉ-キャリア「大学生基礎力レポートⅠ」を使用

◆大学生基礎力レポート： https://www.benesse-i-career.co.jp/univ/service/#sv-report1

◆対象：

大学１年生（入学時）

◆実施時間：

約90分（マークシート式）

◆アセスメント内容：

①基礎学力（日本語理解、英語運用、判断推理）
②進路に関する意識・行動（自己理解、社会理解、進路の明確度、進路実現行動）
③協調的問題解決力（挑戦、継続、ストレス対処、多様性の受容、関係性の構築、議論、課題設定、解決策立案、実行・検証などの諸能力に関する質問）
④大学の学びに対する意識（大学で学ぶ価値、学びへのコミット、見通し、積極性）
⑤学生生活についての意識・行動（大学への期待、学生生活への不安など）
⑥高校までの学びの実態（学習時間、学習方法）

◆調査時期：

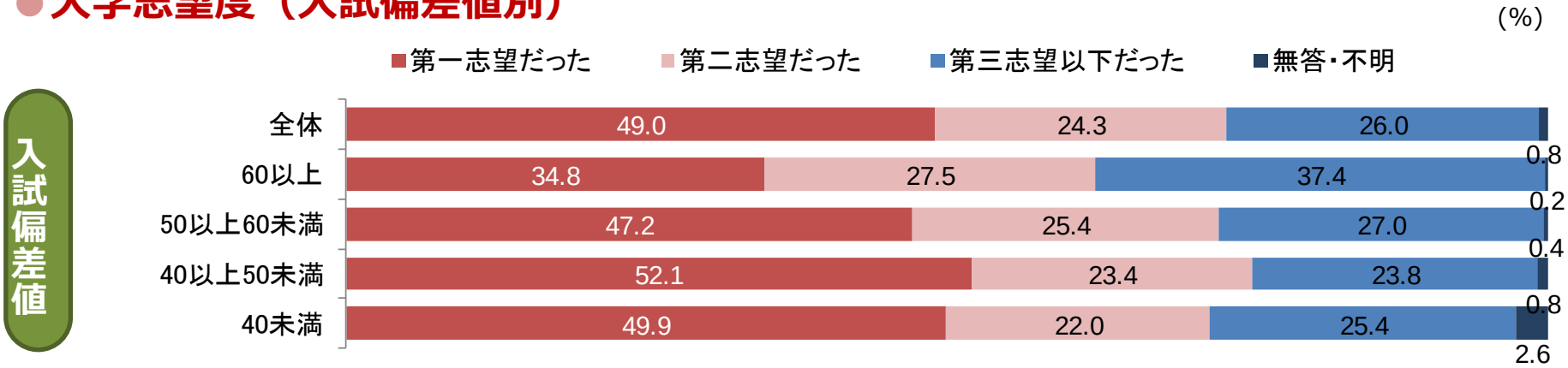
2016年4月実施

◆対象大学数、対象者数：

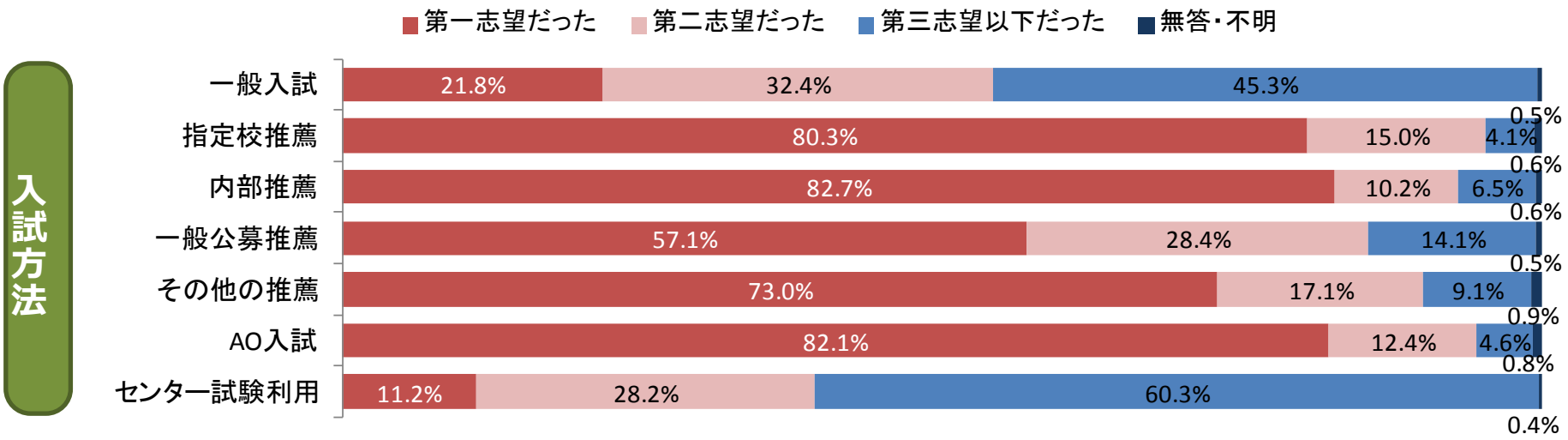
88大学（290学部）の79,343名　　★以後、一部をパネルデータと追跡する予定

大学志望度

●大学志望度（入試偏差値別）



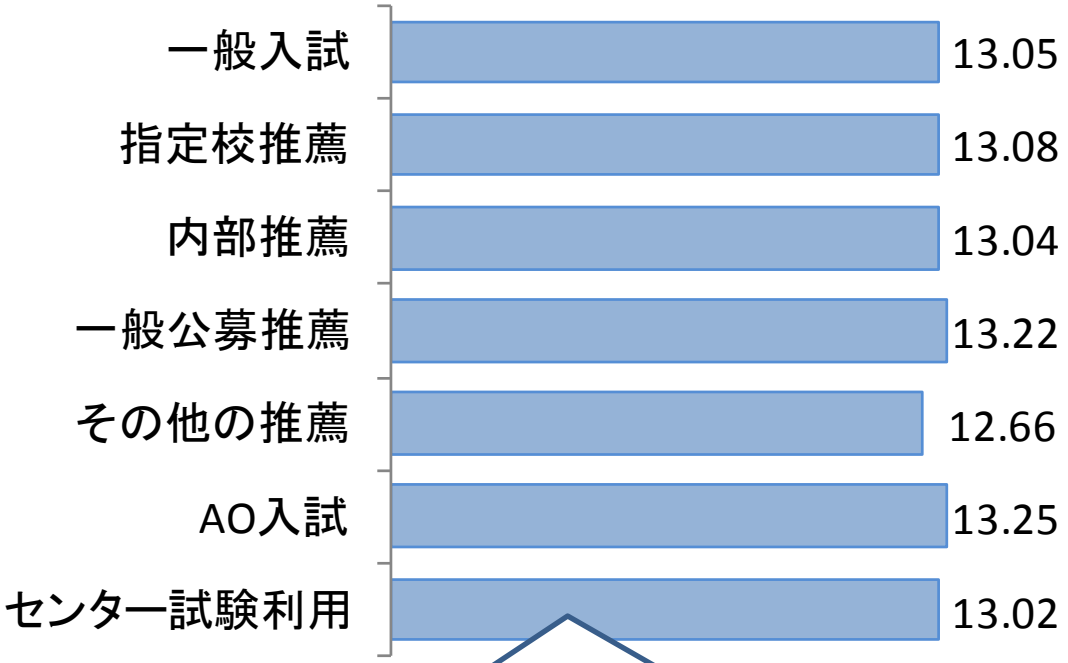
●大学志望度（入試方法別）



推薦・AO入試によって「第一志望」の学生が多く入学

学びに対する意識

●大学の価値



●以下の４項目（４段階）を得点化（４～16点に分布）

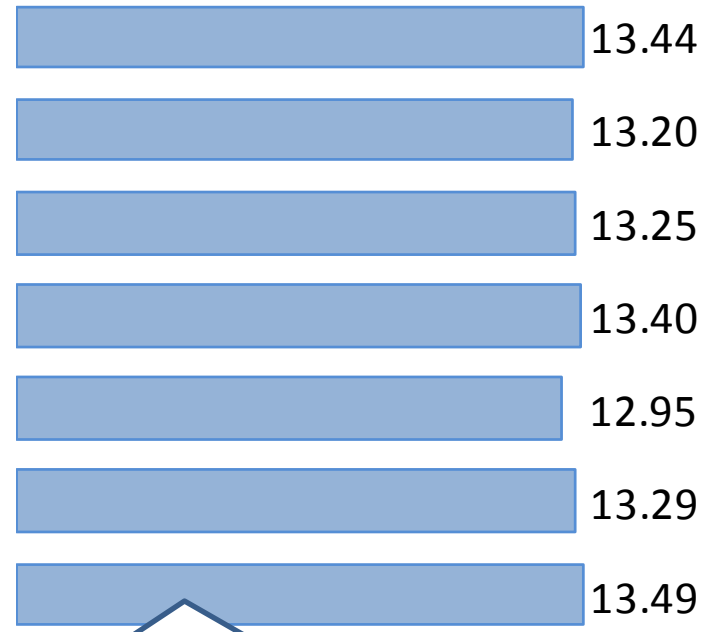
①大学での学びは、将来社会で活躍するために必要な力を高めてくれる

②授業の内容と将来の目標との結びつきを理解している

③大学で学ぶことによって、よりよい社会貢献ができると思う

④大学で「これを深く学びたい」と思える学問がある

●学びへのコミット



●以下の４項目（４段階）を得点化（４～16点に分布）

①厳しい環境でも、やるべきことをしっかりやりたいと思っている

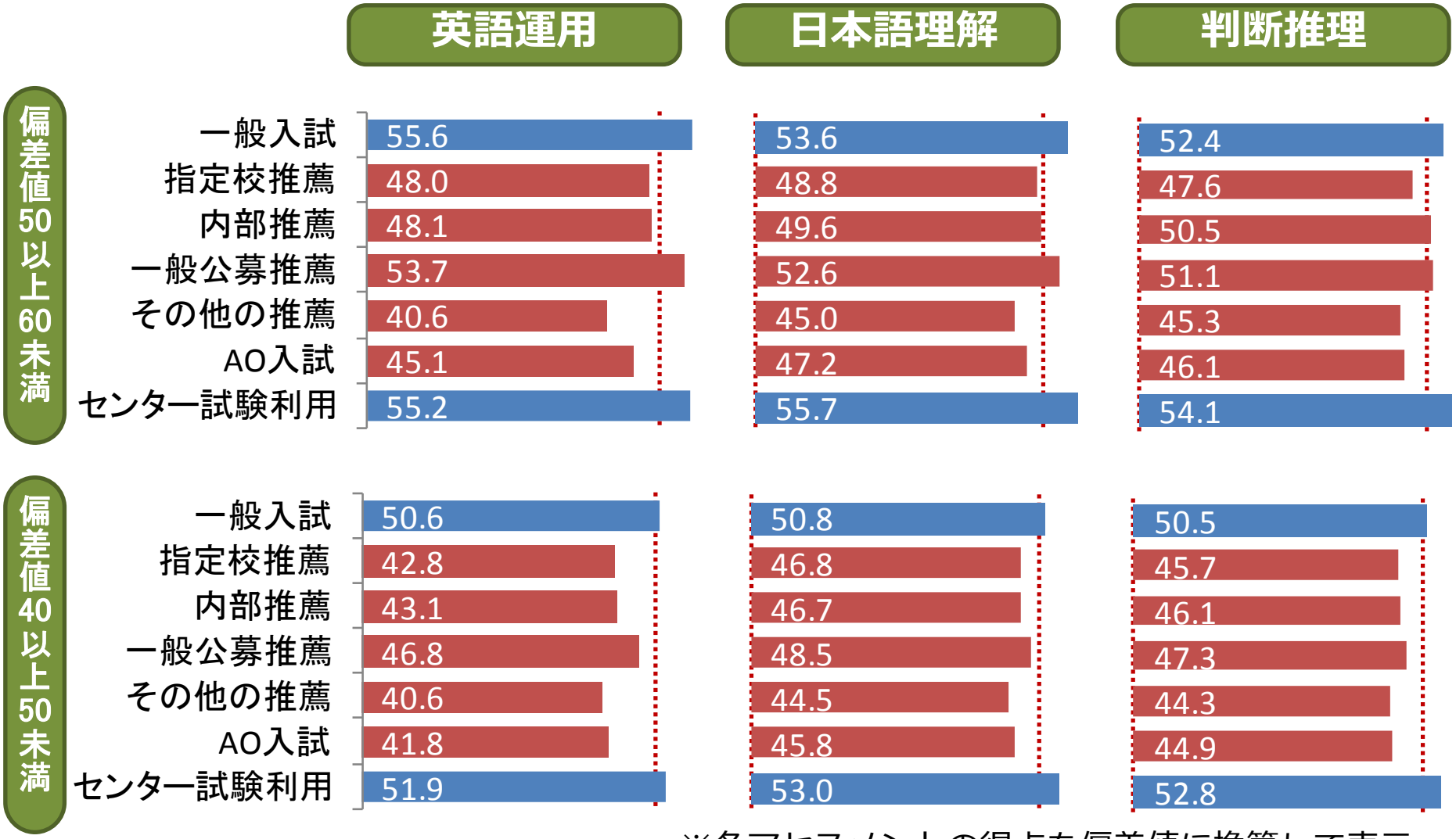
②今の自分に足りない知識やスキルは何かを意識しながら学ぼうと思っている

③将来の自分に何が必要かを優先的に考えて履修科目を選ぶつもりだ

④高い目標を持って学ぼうと思っている

大学での学びに対する意識は、入試区分で違いがない

基礎学力



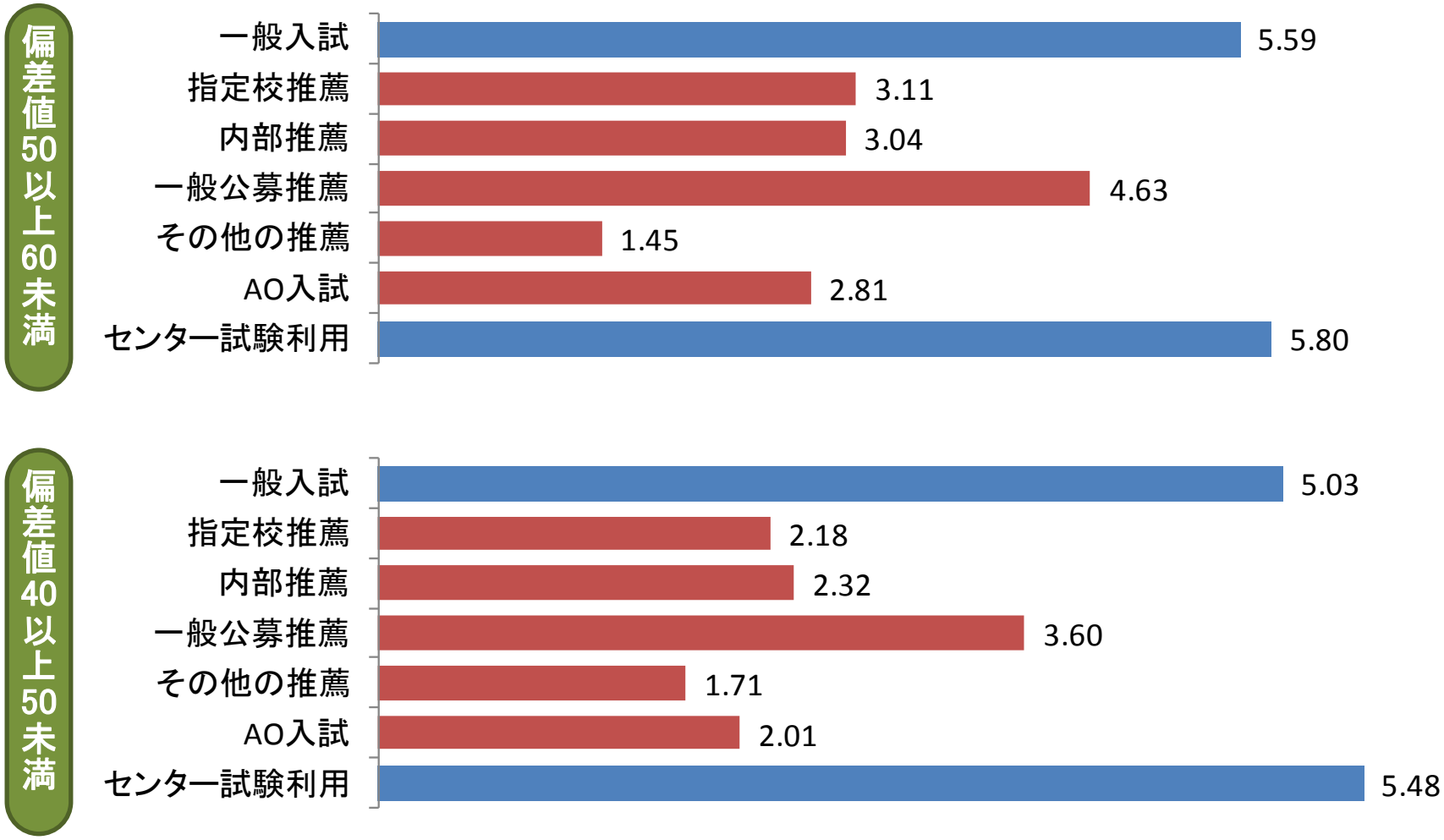
※各アセスメントの得点を偏差値に換算して表示

推薦・AO入試による入学者は、相対的に学力が低い

高校時代の学習時間

●高校時代の学習時間(週当たり)

(時間)



推薦・AO入試による入学者は、学習習慣が身についていない

成果と課題

●データ分析の結果（まとめ）

①大学納得度や志望度は、推薦・AO入学者が高い

②学習意欲は、入試区分による差はない（同等に高い）

③基礎学力は、一般入試・センター試験入学者が高い

④高校時代の学習態度は、一般入試・センター試験入学者がよい

★これらは、大学の偏差値帯をコントロールしてもあてはまる

●推薦・AO入試増加の成果と課題

①成果：学習にコミットしにくい学生の学習意欲や大学納得度の引き上げ
→かつての偏差値による序列を部分的に壊す効果を持った

②課題：学力や学習態度は身についていない
→推薦・AO入学者は高校時代に十分な学習をしておらず、
学習習慣や学習方略を身につけていない

こうした状況は、多くの私立大学に共通

問い（論点）

1．意欲は高いが学力･学習態度が身についていない問題について

1）追手門学院大学

「自己を知る力」「学ぶ力」「計画する力」の可視化を掲げるが、アセスメントからは「学ぶ力」に課題がありそう。アサーティブ・プログラム／入試では、どのような力をどこまで育成・評価しているか。

2）関東学院大学

夏休みにモチベーションが下がるのは、学力や学習態度の不足にも一因があるのではないか。入学後に、どのような力を引き上げることを狙うのか。

2．学びと成長を可視化する意義と課題について

1）ベネッセ教育総研

成長を可視化するプロセスのモデルはどこまで使えるものなのか。使うために必要な条件は何か。

2）追手門学院大学・関東学院大学

①成長の可視化について、全学で共通認識を持つことは可能か。
②学生本人にどのように成長をフィードバックするのか。